

発行

平成30年12月8日

相模原市文化財調査・普及員  
広報グループ

文化庁指定  
文化財愛護  
シンボルマーク

両手のひらと日本  
建築伝統の組物を  
イメージしたもの

～「さねさし」とは、相模の枕詞です～

## 大沢地区の徳本念仏塔

大沢地区の大島には城山から田名へ通じる県道48号（鍛冶谷・相模原線）があり、この県道沿いに市登録有形民俗文化財である徳本念仏塔が3基あります。徳本念仏塔は徳本上人が村に授けた六字名号札を基に村の講中が建てたもので、いずれも表面に独特の文字形状の「南無阿弥陀仏」と「徳本（花押）」が彫られています。

一つ目は、上大島交差点から300m程西側にある大島長徳寺の徳本念仏塔（写真1）です。県道拡幅の際、下九沢内出から長徳寺へ移設されています。背面に「文政二己卯年」（1819）の銘があり、主体部の高さ182cm、幅65cm、奥行き14cmの大きなもので、相模原市内の徳本念仏塔の中で2番目の高さがあります。

二つ目は、上大島交差点の100m程南側の県道沿いに数個の石仏群があり、その中に大島上台<sup>うえだい</sup>の徳本念仏塔（写真2）があります。これも道路改修に伴い上大島交差点から移設されています。主体部の高さは82cm、幅56cm、奥行き29cmで、念仏塔の背面に「文政三辰年」（1820）の銘があります。この念仏塔は大きなヒビ割れで三分割されている状態で、左後部の一部が欠落しています。

三つ目は、大島常盤の県道に面した日々神社の境内左奥にある徳本念仏塔（写真3）です。もとは大島常盤の県道沿いにありました。主体部の高さは90cm、幅59cm、奥行き42cmで、念仏塔の背面には「文政三辰年」（1820）や「下大嶋田名分講中」の銘があります。また右側面には「右大山」とあるなど道標の役割も担っていたようです。

大沢地区には「さねさし」38号（前号）で紹介した下九沢の県道508号線（厚木・城山線）沿いの2基の徳本念仏塔を加えて5基の徳本念仏塔があります。これは相模原市に登録されている徳本念仏塔24基の21%に当たります。また、大沢地区は城山・橋本・上溝・田名の各地区と隣接しており、これらの地区にもそれぞれ5基・2基・2基・2基の徳本念仏塔があります。その合計は16基となり相模原市内の徳本念仏塔の67%を占めます。これらの数値を見ると、市内でも大沢地区とその隣接地区で念仏講が特に盛んであったかが分かります。

（北部班 渡辺）

目次	
・大沢地区の徳本念仏塔	P 1
・相模川 左岸・右岸の（小倉橋～磯部） 渡船場跡めぐり	P 2
・300万年前の中津層群の貝化石	P 3
・上鶴間地区の鎌倉道周辺の 文化財を巡る	P 4



写真1 大島長徳寺の徳本念仏塔



写真2 大島上台の徳本念仏塔



写真3 日々神社の徳本念仏塔

## 相模川 左岸・右岸の（小倉橋～磯部）渡船場跡めぐり

かつて相模川には県内だけでも 30 ケ所ほどの渡し場がありました。西部班は平成 30 年(2018)5 月、10 月の 2 回小倉橋～磯部の左岸、右岸の渡船場跡(相模原市、愛川町、厚木市) 14 ケ所を巡りました。

相模川は交通河川として利用され、津久井地域から来た材木は筏に組み、年貢米等も帆掛け船で平塚の須賀湊まで運んでいました。この相模川を渡る人々のために渡し場は重要な役割を果たしていましたが、各所に橋が架かるなどして、昭和 47 年(1972)、滝～下河原の渡しを最後になりました。

相模川の渡船場跡の面影は、記念碑のある所で感じることができます。併せて素晴らしい展望を提供してくれる場所もあり、特に愛川町六倉から見た相模川と段丘の景色は素晴らしい眺めです(写真 4)。

記念碑に書かれた碑文(当麻、<sup>かみえち</sup>上依知)を紹介します。

**当麻の渡し：**当麻は古くから交通の要所でこの先には対岸の依知とを結ぶ渡し場がありました。特に大山参りが盛んになってからはこれを利用する人も増え、当麻はさらに宿場として賑わいました。

**上依知の渡し：**ここは渡し船のあったところで対岸の当麻村とを結ぶ交通の要衝であった。またこのあたりは一遍上人が水難防除の念仏を唱えられた所とも伝えられている。

(西部班 鈴木)

### 左岸

- ①久保沢(碑なし) ②神沢(碑なし) ③滝 ④久所<sup>くそ</sup> ⑤望地<sup>もうち</sup>  
⑥当麻 ⑦磯部



### 右岸

- ⑧小倉 ⑨下倉(碑なし) ⑩下河原(碑なし) ⑪小沢(愛川町)  
⑫六倉(愛川町) ⑬上依知(厚木市) ⑭猿ヶ島(厚木市)

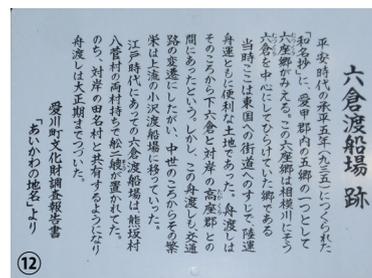


写真 4 相模川と段丘(愛川町六倉から)

## 300 万年前の中津層群の貝化石

橋 57 系統の橋本駅南口発田名ターミナル行きバスに乗車し水場で下車すると、西側に相模川に降りる神沢坂があります。下ると神沢不動堂前を過ぎた河原から神沢崖の露頭（写真 5）が見えます。ここは大島から田名塩田に続く相模原台地の河岸段丘下段で細長い陽原面です。この段丘の高さは、崖下が標高 60 m で、崖上が 106 m ですから約 46 m 近くになります。

神沢不動滝付近の崖に見える中津層群は、関東平野の地層の土台を成すもので、相模川左岸の崖線に沿って大島神沢から下流の田名塩田にかけて分布しています。中津層群は、下部から上部に向かい①こさわそう小沢層、②神沢層、③清水層、④大塚層、⑤塩田層の 5 層から構成されます。

小沢層は礫岩層と多くの貝殻化石を含んだ砂礫岩層から成ります。この層は礫が転がる岩石海岸からそとはま外浜の水深 20 m 前後のせんかいてい浅海底に堆積して形成された地層と推測されています。

一方、小沢層の上に重なる神沢層は、崖の露頭か

ら見てもシルト岩層と砂岩層の互層に成っているのが分かります。神沢不動滝付近の崖は、中津層群の底部である小沢層・神沢層の構成で、第三紀の 300 万年前頃に形成されたようです。当時、ここは海域で、暖流が流れていたそうです。それは、神沢不動滝付近の小沢層・神沢層から暖かい海で生息するビノスガイ・ウバガイ・ベンケイガイなどの二枚貝やダンベイキサゴ類などの巻貝の化石が見られることから推測できます。写真 6～8 において白く紐状の貝の化石が見えるのは、崖のため 2 枚貝が断面で見えるからです。巻貝は見えにくいです。

また、神沢不動滝付近の小沢層・神沢層から、メジロザメの歯の化石が発見され、相模原市立博物館に保管されています。なお、この付近は斜面緑地の崖で、堆積物が剥がれ落ちる可能性があります。近づくると危険ですので、十分に注意してください。

（考古班 駿河）



写真 5 神沢不動滝付近の様子



写真 6 神沢不動滝下部の貝の化石



写真 7 神沢不動滝の下流側奥の地層



写真 8 神沢不動滝の下流側下部の貝の化石

## 上鶴間地区の鎌倉道周辺の文化財を巡る

鎌倉道は、各地から鎌倉へ向かう中世・近世の古道の総称で、代表的なものに、「上の道」、「中の道」、「下の道」の3つの鎌倉道がありました。「上の道」は、多摩川を渡り、町田から境川の東岸に沿って南下する道筋ですが、この「上の道」と並行するように境川の西岸にも、鎌倉道といわれる道があったといわれています。

今回は、金山神社から出発して、中和田天神上公園を経て、上鶴間高校裏門近くの笹山公園までの道筋を巡りました。道中の主な見所を紹介します。

- ①金山神社 ご祭神は金山彦命と金山姫命です。昨今、富と福を授かる神として信仰を集めています。
- ②中和田天神上公園 鎌倉道の石柱（写真9）があります。
- ③惣吉稲荷境内 中和田延文4年（1359）の板碑（双碑）と寛永21年（1644）の旗本大岡義成夫妻の墓碑があります。
- ④泉龍寺 ご本尊は釈迦牟尼仏です。寺伝では創建は南北朝時代で、北条高時の持仏といわれる釈迦三尊があり、また旧市内最古といわれる宝徳元年（1449）の墓石があります。
- ⑤長嶋神社 ご祭神は伊邪那岐命と伊邪那美命です。中和田地域の氏神様で、昭和20年頃まで、東林間、翠ヶ丘、小田急相模原駅付近までの広範囲な地域の氏子を擁していました。
- ⑥道正坂 道正院という寺があったといわれており、道正山には古墳時代の横穴墓があります。
- ⑦笹山公園 鎌倉道の石柱があります。

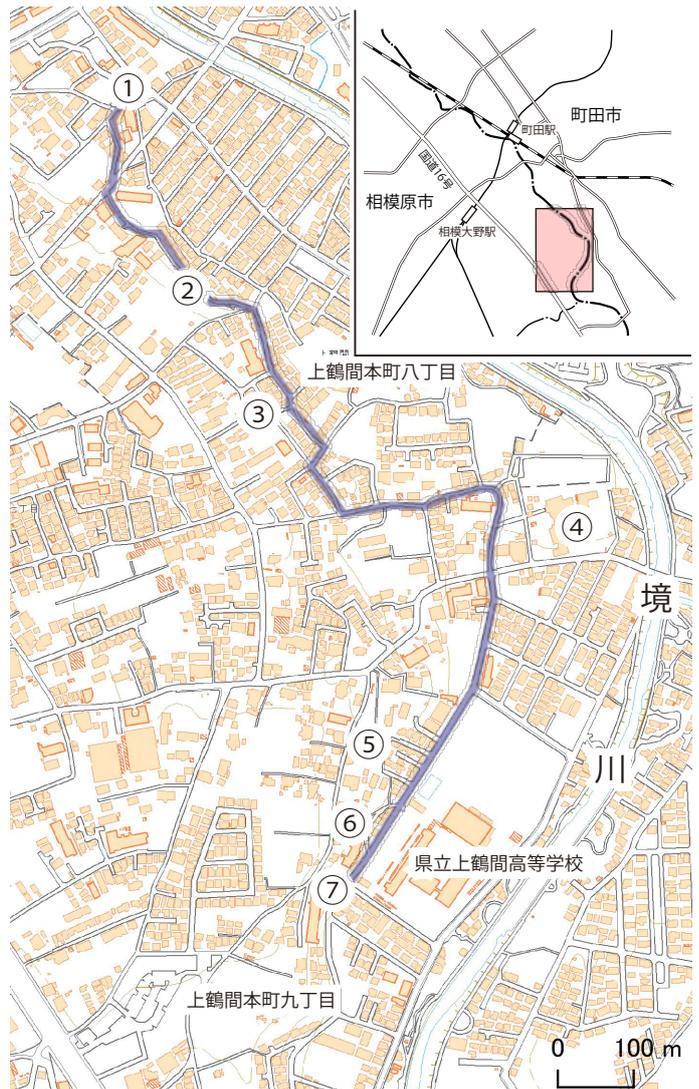


図1 上鶴間地区の鎌倉道周辺（国土地理院の電子地形図（タイル）に地点番号等を加筆し掲載）



写真9 中和田天神上公園

鎌倉道は、時代とともに、その殆どがわからなくなっていますが、古に思いを馳せながら、鎌倉道周辺の文化財を散策してみても、如何でしょうか。

（東南班 吉川）